

【学生フォーラム】

自閉症児とのコミュニケーション - もうひとつの「豊かさ」を求めて -

岡崎女子短期大学 幼児教育学科 山田陽子

昨年春の実習体験をきっかけに、私は「自閉症児とのコミュニケーション」を卒業研究の題材とすることにしました。自閉症について調べるほどに、その姿が不透明になっていくのを感じましたが、この研究をとおしていくつかの結論と課題を得ることができました。「障害は障害を見る人の眼の中にある」という言葉があります。人と人が互いに尊重しあえる街の Emotional intelligence についても考えました。

はじめに

岡崎市は歴史や文化を持ち、経済面や学術面での豊かさも兼ね備えています。しかし歴史を持つ古い街であるがゆえに、閉鎖的な一面もあると指摘されることがあります。岡崎市に求められるもうひとつの「豊かさ」とは、人間的な共感力の高い街を作ることではないでしょうか。私は短大の「異文化コミュニケーション」ゼミで、人と人が理解し合うことの大切さと難しさを学習しましたが、実習体験をきっかけに「自閉症児とのコミュニケーション」を卒業研究のテーマとしました。自閉症とはどのような特徴を持つのか？保育者や保護者はどのようなコミュニケーションをとればいいのか？保育士を目指す私にとっては現実的な課題でしたが、自閉症について学ぶうちに、そこで得たことは全ての対人関係のベースとなっているのではないだろうかと思うようになりました。さらにこの研究をとおして、街の「豊かさ」についても考えてみました。

1. 自閉症とは

自閉症の主な特徴としては、社会性障害、コミュニケーション障害、こだわり、があります。「社会性障害」とは人や状況に対して通常の方法で関わるできないということです。例えば視線が合わなかったり、スキンシップが苦手であったりします。「コミュニケーション障害」とは、コミュニケーションを目的として言葉を用いないことです。オウム返しや突発的な発言があげられます。「こだわり」は常同行動ともいわれ、特定の物や行動パターンに異常に執着することです。例えば極端な偏食がみられたり、同じ順序、色、道筋でないと納得できない等ということもあります。

自閉症の原因としては、中枢神経系になんらかの異常があるのではないかとも言われていますが、はっきりとは解明されていません。また発生率は、1000人に1人か2人の割合で、岡崎市の人口に当てはめると、少なくとも市内に360人以上の自閉症児・者がいるという計算になります。男女比では4対1の割合で男性に多く、また、自閉症者の80～90%に知的障害がみられますが、IQが正常範囲かそれ以上である「高機能自閉症」とよばれるものもあります。治療法としては主に遊戯療法やTEEACHプログラムなどが用いられていますが、症状を完全に無くすことは困難であり、一進一退を繰り返しつつ改善してゆくといわれています。

2. 保育現場での自閉症児

保育現場では自閉症児にどのような対応をしているのでしょうか。岡崎市内の保育園に

通うA君(4歳児)の事例について、保育士の先生の対応や思いなどを伺うことができました。A君は自閉症の特徴がとてはっきり出ている子で、言語発達の遅れ、特定のファーストフード店のフライドポテトしか食べないという極度の偏食、独特の発声などがみられたそうです。偏食への対応として、先生は無理強いしないことをモットーに、食事の雰囲気作りに努めました。無理強いしたくないと思う一方で、いろいろな味や食感を知ってほしいという願いもあり、大変苦しまれたそうです。また、A君の世界に近づくために、先生もA君の発声を模倣するなどの工夫をされた結果、少しずつA君が先生の側にいられるようになるという変化が見られたそうです。

保育士は治療の専門家ではありませんので直接的な治療行為はできません。しかし自閉症児の生活レベルを上げる援助はできると思います。具体的には、生活に見通しを持たせること、できるだけ明快な言葉がけに努めること、また自閉症児の「ルール」を知る努力をすることです。自閉症児とのコミュニケーションに、唯一の正解はありません。一人ひとりの感じ方や行動の癖を知る努力の継続が大切だと感じました。

3. 卒業研究から学んだこと・新たな課題

「障害は障害を見る人の眼の中にある」という言葉があります。自閉症児を「特別な子ではなく、特別な配慮を要する子」として受け止めていく「保育士のまなざし」が大切であることを知りました。この卒業研究から学んだことは、知らず知らずのうちに「特別な子」という先入観を持ってしまう危険性に気づくこと、自分の期待や常識を押しつけないこと、そしてコミュニケーションを焦らないことの大切さです。また、対人関係の前提は「自分自身を知ること」であり、もっと自分のEmotional intelligenceを高めなければいけないという課題を得たように思いました。

4. Emotional intelligence と Affective competence

Emotional intelligence とは、1997年にアメリカの心理学者が提唱したのですが、EQと略されて知能指数を表すIQと対比的に用いられる概念で、人間として知的能力だけでなく、感情的、人格的な能力が重要であると指摘したものです。そのEQをさらに具体的に示したAffective competenceという概念もあります。これは中部大学の塩澤正先生が提唱されているもので、心理的葛藤を克服し、コミュニケーションをとろうとするエネルギーや能力をさしています。Affective competenceの中には、観察力、共感力、あいまいさや葛藤に耐える力、大きな軌道修正力、問題解決能力などが挙げられています。とりわけ、「相手の行動には自分の知らない理由があるのかもしれない」と、一方的な判断を保留できる能力や、自分が間違っていたと気づいたときに、自分の行動を変えていける能力などは、自分と異なるコミュニケーションパターンの人と付き合うときに極めて重要であるといわれています。

このようなAffective competenceを身につけることによって、個人としてのEQや職業人としてのEQを高めていきたいと思っています。また、そのことが、市民としてのEQを高め、街全体のEQを高めることにもつながっていくのではないのでしょうか。

5. 岡崎市への提言

街の豊かさを測るには三つの基準があるのではないかと思います。一つは、ハードウェアの面から見た豊かさです。これは河川や道路や公共設備がどの程度整備されているかという目に見える豊かさです。次にソフトウェアの面から見た豊かさが挙げられます。観光開発や子育て支援のような様々な政策やアイデアを取り入れていくという側面です。そして私の考えるもう一つの「豊かさ」とは、ヒューマンウェアの面から見た、市民のEQの高さを基準とする豊かさです。様々な背景を持った人々が気持ちよく互いを受け入れあ

って暮らせる街、つまり人間的な共感力の高い街であることも豊かさの基準であると思います。岡崎市がこのような三つの豊かさを持った豊かな街であってほしいと私は願っています。